2008/07/2

佐藤ゼミ「環境と人類」（水 5）

M2 神谷美和

7　Ecologic Relationship of Ethnic Groups in Swat, North Pakistan

Fredric Barth

【p181－para1】

形態と文化分布という生態学的要素の重要性

　―文化圏という概念によって分析されてきた

　　― 北アメリカのアボリジニーの文化（Kroeber1939）をもとに発展

　→類似手順によってアジアの文化圏にあてはめようとする試みは難しいことがわかった

（Bacon1946，Krober1947，Miller1953）

　…文化のタイプと民族、自然空間は一致しないため

・Coon（1951）…中央アジア社会はモザイク構造

　― 本来は異なる文化の多くの民族が一つの領域に多様で親密な共生関係で共存

・Furnivall（1944）…オランダ領インド諸国を複数社会として述べている

　→いずれの場合においても共通の特徴は民族の区分と経済的相互依存の組み合わせ

　特定のひとつの民族の「環境」とは（定義）→

　　・自然の状況

　　・自然の状況に依存する他の民族の存在と行動

　どの集団も全環境の一部分のみ開発、大部分は他の集団の開発のために残しておく

【181－2】

この相互依存…一つの生息地における複数の異種の動物と類似

・Kroeber（1947：330）…文化圏の分類＝本質的に生態学

→生態への詳細な考察は、亜大陸サイズでの地理学的領域よりむしろ新しい出発点を提言すべき

最近の論文…ある動物の生態考察を用いることにより、分布のケース・スタディへより明確に生態学的なアプローチを行っている

　niche「生態的地位」＝全環境における集団の場所、資源と競争相手との関係

（cf.Allee1949:516）

Groups

【181－3】

最近の事例：簡潔・相対的言及…パキスタン北西辺境州スワート県の主要な 3 民族関連のもの

　（1）パターン人　…パシュトー語を話す。「イラン語族」で定住農耕民。

　（2）コイスタン人…ダルド語を話す。農耕と集団で移動牧畜。

　（3）グジャール人…グジリ語（低地インド方言）を話す人々。遊牧民。

　古代　　コイスタン人がスワートのほぼ全域に居住していた。

　AD.1000~1600　パターン人が征服者として侵入、連続して移住してくる。

　1550 ころ　　グジャール人現れる。

パターン人：約 45 万人　　コイスタン人：おそらく 3 万人　　グジャール人：不明

【182－1】

　1917 年　スワートで最初の中央政権樹立

　1947 年　最近の拡大＝併合 ―中央政府は分布問題を議論するべき機能なし

Area

【182－2】

スワート県　―スワート川とインダス川のなす二つの主要な谷を含む

スワート川―・高山 18,000 フィートの高さから北に向かって流れる

・下降につれ水量増加→深い峡谷入る　谷の上部は狭くて急

・約 5,000 フィートから谷は一つになり広くなって南に向かう

・山の側面を流れ、標高 12,000～6,000 フィートに下る

・蛇行　→谷の下部は広大な沖積平野

【182－3】

スワート県　東の境界―インダス川による　西岸と支流は論争中の地域を含む

インダス川―　大河となって流れ込む

…深さ 15,000 フィート、広さ 12～16 マイルの壮観な峡谷を流れる

・北側の谷の麓でさえ少なくとも海抜 3,000 フィート

・周囲の山―18,000 フィート

・支流に形成された谷―短く深い、急勾配

・南方―周囲の山々は川岸から離れ、低くなる

沈殿物を堆積させて降下、支流は広い谷を形成

【182－4】

インダス川流域…

・高度によって気候が変化

・年間降水量は少ない

・南方の高度の低い地域―長く暑い夏季、広大なステップ地帯

・インダス峡谷は「氷の砂礫に嵌め込まれた荒野」とされてきた（Spate1954：381）。

・高山―部分的に永久氷雪に被われる

比較的低い場所―短い夏季に山地の自然の草地によって平らに

中間地帯―マツとヒマラヤ杉による広い森林帯（6,000～11,000 フィート）

Pathan－Kohistani Distribution

【182－5】

これまでの歴史学　―　村落の地名と無人の廃墟→

コイスタン人居住者がパターン人の侵入によって次第に北方へ押しやられたとみられていた（cf.Stein1929:33,83）。→現在このコイスタン人の北方移動説は見直された

→コイスタン人とパターン人領の境界―　実際は長期間安定していた

スワート谷での最後のパターン北方移動

―　八代前の聖 Akhund Sadiq Baba の指導による

現在の確固とした民族的境界を説明できる要因理解のため

…現在のパターン人の経済と組織の明確な生態学的必要性を検証することが必要

【182－6】

スワートのパターン人…複雑で多様なカースト階級社会

・Pakhtun 階級　　…土地所有層、部分的に集住、単系相続集団

・他の階級や多くの集団…政治的に庇護される人、経済的隷従民として連携

・生業…分業とよく発達した鋤による農耕が基盤

・主な栽培穀物…小麦、トウモロコシ、米

・耕地…人工灌漑

土壌の性質と水の供給によって→
・施肥
・複数の輪作体系と定期的な耕地休閑のリズム―慣習化
すべての稲作地＝苗代からの移植による水田
【182－7～183】
・パターン人地域のみ農耕に従事
・他の多くの集団は現物支給の専門的サービス―農耕従事者は大きい余剰の生産が必要
政治機構― 地主による強い階級的組織と政治活動による…男たちの家 men's houses（*hujra*）中心に
→人力を生産活動から阻害
・大きくより組織化されたパターン族…
スワート谷の低地、インダス川のさらに南方の支流沿い―広大で肥沃な沖積平野に居住
・より簡素な政治組織…パターン人領の北方周辺部に
― 宗教的家系に基づく（男たちの家（hujra）はない）
→この（組織の）簡素化は、共同体の経済をより効果的にしている
(1) 男たちの家の浪費的なポトラッチ型の祭りがないということ
(2)穢れなき聖者に政務所を与えるということ→他のパターン人領域で、政治指導者を防御する多くの隷属者をなくす
【183－1】
パターン人領域…批判生態学の出発点に拡張
二つのうちいずれかの穀物をその年に収穫できるということの限界― 高度による
パシュトー語族のうち 2 少数民族（Jag ; Duber 谷、Kalam の一部）北限に居住
― 他のパターン人とはちがい、経済や政治組織が隣接のコイスタン人に類似
【183－2】
結論：
・二毛作による限界→パターン人のより遠方への拡大を促すことは不可避
・パターン人の経済と政治組織― 農業労働が多くの余剰を生むことを必要とする
・辺境の高地―（Dir 族の領域のように）政治組織は緩和され「節約」される。
→二毛作の限界をこえて、経済と社会システムを存続することは絶対にできない
【183－3】
コイスタン人―この限界による制限なし
…かつて限界地にまたがっていたが、侵入者であるパターン人により北方へ押しやられた
→パターン人にとっては制限であった限界地を自由に横断
→パターン人とコイスタン人の 政治・経済組織のちがい / 生態的必要性のちがい → 連携へ
【183－4】
コイスタン人―パターン人のように、発達した鋤による農耕を行う
・占有する土地の地勢のために、耕地は狭くて人工的な段々畑
― 設置にはかなりの土木技術が必要
・コイスタン地域― 夏季に雨を期待できない→山地の多くの残雪から流れる川
― 耕地に複雑で大規模な灌漑体系を通じて水を供給
・ある程度の施肥
・気候条件によって食用穀物の品種は限定
→・トウモロコシとキビは最も重要
・小麦と米は低地で収穫

…夏季が短く、年間一種類の穀物しか収穫できない

【183－5】

（コイスタン人）

農法はパターン人とあまりかわらないが、収穫量は少ない

→二重経済構造を持つ― 移動牧畜は農耕同様に重要

→ヒツジ、ヤギ、牛や水牛で羊毛や肉、ミルクを保持

・家畜は夏季、山上の牧草地に

→ほとんどのコイスタン人は、地域の状況によって毎年４ヶ月から 8 ヶ月の間過ごす

ある地域では、全員が５ヶ月ほど冬季居住区である山麓から夏季居住地である 14,000 フィートの高度まで移住

…放棄した低地居住区域はそのままにして移動

地面が年に数ヶ月雪で覆われるスワート谷上部

→家畜の飼料は集めて貯蔵

【183－6】

（居住地移動）他の側面：

コイスタン人― パターン人の占拠を最小限に抑制

→住むのにはふつう不適な山地が居住地

→長期間自治体を保持

→主要な領地はスワートにより 1926 年、1939 年、1947 年に征服された

かつて（現在も）400 人～2,000 人の居住者による行政村に分けられている

・どの共同体も緩やかに結びついた多くの父系家族に細分

・中央の政治機構は村会議― 土地所有者で最小単位の家系には代表者がいる

・どの共同体にも鍛冶屋兼大工職人の家族がいる

・小作人や農場労働者の世帯もいる

【183－7～184】

隣り合った共同体同士が同じ方言や言語を使うこと＝政治的に融合

外部からの脅威にあった場合などは、構成員から突出した指導者による共通の議会によって指導

→政治的融合を果たす

―これらのより大きなユニットでさえ、スワートで動員できるパターン人の訓練兵による大きな力には持ちこたえられなかった

＝パターン戦力は推定 15,000 人

（1862 年、英国によるアンベーラ・キャンペーン間による数値）(cf.Roberts 1898,vol.2:7)

“Natural” Subareas

【184－1】

・最近のスワート県…コイスタン人にとって単一で自然な地域　→

・かつて一つの民族としてスワート全域に住んでいたため

・（スワートの）どこででも経済を機能させることができるため

パターン人の侵入→コイスタン人は土地を防衛することが不可能であると悟る

コイスタン人にとって自然な地域として構築された土地

―パターン人が入り込めないラインによって分断

・パターン人から見たスワート―　二つの自然な地域

・パターン人が住むための生態的な必要条件

・居住に適さない場

（コイスタン人）
・軍事力がないかわりに旧領を保持することをパターン人に許可してもらう
・残った者―征服者のパターン人社会に農奴として融合するか、追い出されるかどちらか
【184－2】
純粋に共時的観点―現在のパターン人とコイスタン人の分布
＝簡潔で固定的な二つの民族図― 2 つの別個の文化圏を示す
＋文化圏と自然領域の間の明確な調和
＝｛コイスタン人：厳しい気候と針葉樹の森に覆われた高山
　パターン人：暑い気候と貧弱な植生の広い谷
時間の経過→自然地域の概念→支障をきたす可能性
→経済的必要性と関連した特定の生態的要素に
【184－3】
＝他の民族集団との関係におけるグジャール人の分布分析―このような手順が必要
グジャール人はパターン人、コイスタン人どちらの地域にも見出される
→どちらの地域でも、２つの異なる経済パターンに従う
＝｛・季節移動による牧畜
　・真の遊牧
グジャール人―
・パターン領すべてに分布
・コイスタン人の地域では西半分にのみ居住
東半分には居住しないし訪れることもない
・山と谷に分離していることは、グジャール人にとって不適切なようである
・山地―パターン人にとっては居住には不適切→コイスタン人が利用
→グジャール人が入り込めない障壁によって分断
グジャール人の生活における経済活動とその他の特徴―
分布状態や分析可能な基本的要素（を述べる）よりも前に述べられるべき
【184－4】
グジャール人…浮遊人口＝家畜所有者で構成
―受け入れ社会にさまざまな形で同化しているため、不明瞭
・肉体的特徴は服装・言語同様、彼らの多くはすぐに見分けられる
・音楽、踊り、通過儀礼は受け入れ側の民族とは異なる
・政治的地位は受け入れ側への従属形態の一つである
【184－5】
グジャール人―父系同姓の部族かクラン単位に細分される
…血のつながりにこだわらない、共通の先祖の子孫（知っている知っていないにかかわらない）だと主張する（集団）
しばしば一族の起源に関わる神話があり、クラン名の語源となっている。
一族には大小あり…もっとも小さいグループは特定の地域に集中
血族集団の有効性―限られた代まで遡る
異なるクランの見知らぬ構成員よりも、同じクラン名を持つ繋がりのないグジャール人との間のほうが、より親近感をもつ
＝婚姻の規定としては不適切
グジャール人と受け入れ社会との間の婚姻はほとんどない。
【184－6】
グジャール人経済

―主として羊、山羊、牛、水牛の牧畜に負う
　＝畜産品 +穀物（トウモロコシ、小麦、キビ）が必要
　　→・辺境の高地で自給自足
　　・または精製バターや肉、羊毛の交易の代償として入手
必要不可欠な物→違った二つの生活パターン＝季節移動と遊牧によって充たされる
…パターン人はグジャール人をこの２様式により、「グジャール」と「アジェール」という言葉
　によってそれぞれ区別― 民族的に分かれたものとみなす
→事実、グジャール人は次々に生活の様式を変化
【184－7～186】
・家畜との季節移動は主にパターン人領域にいるグジャール人によって行われる（まれにコイ
　スタン領域でも）（see Figure7.1）
グジャール人とパターン人の共生関係にはさまざまな形がある（真に親密な例もある）
パターン人は複雑な階層（カースト）社会を形成
―グジャール人はそこで牧畜の専門的職業階級として同化している
　＝ほとんどのパターン人の村落にはグジャール人が混在している
　　グジャール人― 彼らの言語であるグジリ語を話す
　　― 彼らの独立した文化を保持
　　あるいはパシュトー語のみ話す地域へ同化
→政治上は被保護人または農奴階級の共同体として統合されている
・グジャール人の役割＝動物の世話（主として水牛と牛）
　　・（パターン人などの）土地所有者の使用人として
　　・または独立した水牛所有者として
　→村経済に乳製品（とくに精製バター）、肉、肥料を供給
　　└ 重要。耕地へ注意深く利用
【186－1】
　ほとんどのパターン人の村落― パターン人のみ利用できる、薪のための里山を管理
　→移動牧畜するグジャール人― 夏季牧草地のために高地に群れを移す ―▲
　　→パターン人に固定税（＝使用料）を動物ごとに現物で支払う
　　＝土地所有者（パターン人）が消費するための良質のバターを供給
グジャール人―
・農繁期（とくに田植え）に（パターン人のため）農業労働者として働く
・夏季居住地に夏季の後の収穫のために種を撒く
【186－2】
コイスタン人の領域―グジャール人とコイスタン人の共生関係はあまりない
　・しかし、冬季居住によっていくつかの耕地を移動することを除き、様式は類似
【186－3】
…移動牧畜のサイクルは地域的なもの
・あるグジャール人― 谷の麓にあるパターン人の村から、村からも見える 1000～1,500 フィ
　ート上の山麓の夏季居住地にたんに移動するのみ
・他のグジャール人― 冬季の受け入れ側であるパターン人領域から、（そのパターン人とは）
違ったパターン人部族の領域の夏季放牧地へ 20～30 マイル移動
【186－4】
・遊牧民―かなり遠くまで（おそらくは 100 マイルも）移動
　　…夏には高山の牧草地を使用し、冬には低地の草原を利用
・移動牧畜するグジャール人― 水牛を重視

遊牧民はより動きやすいヒツジやヤギに特化
but.この 2 つのパターンはあまり区別されていない
…ある集団は両方の要素が結びついている
— パターン人領域の境界の丘で春を過ごし、そこに穀物の種を撒く
→夏になると・男たちはヒツジやヤギの群れを高山に
・その間女たちは残って水牛と耕地を守る
→秋になると男たちは家畜の群れとともに帰ってきて、穀物を刈り取り、牧草地を利用
→最後に穀物を貯蔵して、水牛をパターン人の村人とともに出荷
→ヒツジやヤギと冬を過ごすために低地草原に下っていく
【186－5】
真の遊牧民—けっして農業には従事しない
…牛の世話はするかもしれないが、水牛を請け負ったりはしない
政治的な自治組織の程度—年間移動の長さに比例
地域内移動牧畜するグジャール人は、個人的にパターン人指導者と結びつく
—パターン人との部族的境界をこえるグジャール人
→小家族を組織…家畜に草を食べさせるための税金が少なくなる契約
真の遊牧民— 家畜の群れと、ともに短期間キャンプする 50 家族ほどの移動集団
…まとまっている＝一般的に多くの小家族で成立
…しばしば違ったクラン— 姻戚関係か母方親族によるつながり
→単一の指導者に率いられている
…他の政治組織に管理されている領域での移動であるが、自身の節度・規定ある組織を保持している

Gujar Distribution
【186－6】
グジャール人とパターン人— 1 地域での共存→共生関係上とくに問題ない
パターン人—占住する谷にある<u>山の側面</u>を管理する軍事力を持つ
＝but.実際の利用方法はない
→非占拠のニッチを残す
→グジャールの民族が入り込む
→移動牧畜様式を通して政治上依存的地位に自身（グジャール人）を順応させる
…共生の利点は満足と忍耐の関係をつくる
→結果として、パターン人が谷からコイスタン人を排除したことになった領域へ、グジャール人が広がっていったと考えられる
＝コイスタン人が彼らの移動牧畜を通してかつて多く居住していたニッチ
→専業農耕民であるパターン人が谷の麓を征服
→空いた領域にコイスタン人の代わりにパターン人が入る
【187－1】
グジャール人とコイスタン人との共存→問題を引き起こす
…2 集団が同じ自然資源を利用、同じ生態的空間に占住するため
→競合して、その地域から一方か他の民族を追い出すことが予想される
→but.・二つのグループで武力衝突になることはまれ
・一方が他方を犠牲にして増えていくことはみられない
ところで、もし確固とした共生または争いのない関係が 2 集団の間に築かれていたとしたら、なぜグジャール人が西コイスタンに集中し、本質的に似たような東コヒスタン地域に住まない

のか？
　→答えは、自然環境やグジャール人の経済上の性質においてのみならず、関連性のある社会的環境において見いだされるにちがいない
　　＝グジャール人の利用に適する空間に影響するコイスタン人の経済と組織的特徴

East vs West Kohistan
【187－2】
以上のように、
・コイスタン人は農耕と移動牧畜とが結びついた二重経済を持つ
　→穏やかで大きな共同体で生活
・ほとんどのグジャール人はある程度の農耕を行うが副次的
　― シンプルなタイプ、変化なし
　　・灌漑よりむしろ春の雪解け水や夏季モンスーンによる降水に依存
　　・施肥をするより耕地移動を行う
・コイスタン人においては、農耕と牧畜のバランスは等しい
　…急な斜面は複雑な段畑と灌漑が必要
　　→移動農法を不可能にし、より集約的な技術を促進
　　・家畜の規模は耕地の規模によって制限→家畜の冬季飼料の多くを供給
　　― 自然の耕地と山間の牧草地は、干草を与えるための冬季居住地からとても離れているため
二つの大きな経済活動のバランスと密接な関連ある生態的要素
→コイスタン人の分布、居住密度と最も大きく関連する
【187－3】
東と西のコイスタン＝インダス川とスワート川の排出地域―大きな違いがある
・インダス川と支流の最も低い部分 ―少なくとも 3,000 フィートの高さを流れる
・スワート川はコイスタン人が居住する谷で 8,000 から 5,000 フィート下る
　― 西のより高い所では、居住のための経済基盤に多くの影響をもたらす
　　(a)農業生産は、西の谷ではより短い農期と低温のため減ぜざるをえないこと。
　　(b)・高度の違いは、わずかに西部に降水量を増加させ、多くの雪の蓄積をもたらす
　　・インダス川の河岸が雪で覆われるのはまれであるが、高地のスワート谷の雪は冬季を通して蓄積される傾向― 谷の麓に４、5 月まで残る
　　→西コヒスタンで定住性の資本家は、貯蔵していた飼料を冬季 4 ヶ月を通して家畜に与えなければならない。
　　(c) 西コイスタンの短い農期―
　　・食料としての米（最も土地単位につき生産性がある）が見込まれる
　　・家畜のエサであるトウモロコシ（種子重量に対し最も収量が高い）は少ない
【187－4～188】
これらの特徴→西コイスタンの農業生産と、それによって冬季を通じて養育できるたくさんの動物とに制限を加える
夏に家畜が草を食べる可能性を制限するものはない
…東西コイスタン―広くて繁茂した牧草地や他の夏季草地がきわだつ
　＝牧畜をする人が利用できる自然資源は豊か
　　― しかし、山の牧草地は季節的なもの
　　→年間を通した牧草として依存はできない
　移動牧畜・遊牧の様式＝生産可能な季節に山地を利用するように発達

→1 年の残りの時期―他の場所や技術に依存
・真の遊牧民― 生態的空間のよく似た他のニッチに移動
・移動牧畜― 一般的に互換できる技術に依存して異なるニッチを利用
＝そこでの農耕と家畜飼料の貯蔵分を利用
→2 つのニッチでの生産性はバランスがとれている
＝東コイスタンにおける地域的な移動牧畜による開発地
∴インダス川河口では、コイスタン人は冬季を通じて農耕と食料貯蔵の方法によって、人間と家畜を十分に養うことができる
― 周囲の山の夏季牧草地を十分利用するため
生態学的観点からみると、地域的な人口はどちらのニッチにも多い
→スワート谷にはそのような均衡はない
農業生産の制限→家畜数と人口に限界
山地牧草地全体の開発を妨げる
→部分的に空いた空間を残し、遊牧民であるグジャール人が利用できる
＝冬には地域外の低地草原に
グジャール人の集落…西地域の主として最上部に散在
コイスタン人とは異なる技術と消費形態→
コイスタン人の永久的占住のため、最小限の必要にも欠乏するような地域に生き残ることができる
→コイスタンにおける最近のグジャール人の分布
―地域の西半分に限定＝これらの要因のため
【187－1】
簡素・決定的な最終ポイントは、この分析によるべき
：なぜコイスタン人は最初の選択を行ったか？
：なぜグジャール人だけがコイスタン人の残した空いた土地に入るのか？
―もし彼らがもっと領域を開拓していたら、最終的にコイスタン人にとってかわったに違いない―組織的な要素
・コイスタン人―密集して、政治的に大きな村を組織
・グジャール人―・四季サイクルが同様の発達を妨げる
・冬季に彼らはパターン人の領域に下るか、パキスタン領にまで入ることも
→季節的に彼ら自身よりも強い組織の影響を受けやすい
→四季の移住＝そのような組織によって統制された領域を通して、（その組織の）フィルターにかけられざるをえない
→小規模・人目につかない集団で旅をし、冬季に分散居住することによって順応しなければならない
…純粋なコイスタン人の環境において、コイスタン人にとって替わる必要性からの政治組織レベルに達することができたにちがいない→
― 高レベルに組織化された隣接地域への依存→これを不可能にしている
【187－2】
移動牧畜民であるグジャール人（かつての遊牧民集団）のコイスタンにおける居住
― 隣接居住のコイスタン人によって居住を許可 →政治的従属を維持
すでに確立していたコヒスタン人の組織的卓越
― 生産方式や領域の権利を享受することから阻害…遊牧民同様
スワート県による現在の統制下に生ずるであろう変化 ―異なる問題となる
【187－3】

→この事例は、民族や文化、経済の分布、そしてアジアの 1 地域におけるモザイク型共存問題において、生態学的要素の議論に適用できる、確実な視点を提示しているだろう

（1） 民族の分布は、客観的で固定的な「自然地域」によってではなく、特殊な経済と政治組織をともなう集団が開発できる、明確なニッチの分布によって左右される
最近の事例では、コイスタン人にとっての単一の自然地域
—パターン人の関りを考慮して細分化
→グジャール人の特別な必要性に敬意をはらって分割

（2） もし異なる民族が異なるニッチを開発し、共同の経済関係を築くことができたなら
→異なる民族が 1 地域に安定して集住し自らの集団を確立（— スワートでのパターン人とグジャール人のように）

（3） もし異なる民族が同じニッチを十分に開拓できたなら
→軍事的により強力な方が弱者にとってかわる
（— パターン人がコイスタン人にとってかわったように）

（4） もし異なる民族が同じニッチを開発し、彼らのうち弱者の方が境界環境を利用できたなら
→その集団はおそらく 1 つの地域に集住するだろう
（— 西コイスタンにおけるグジャール人とコイスタン人のように）

・このような法則がはたらくところ…西・南アジア
∴ネイティブ・アメリカ（北）のようなところで発達した「文化圏」の概念→不適当
・異なる民族と文化タイプ—分布は重なり合い、境界は不一致
・社会的に多様に連携…コヒスタン人とグジャール人の「油断なき共存」から→親密な経済、政治、カーストの儀礼共有へ
・全体の生態学的分類と民族分布の一致（Kroeber（1939）による北アメリカでの記録）→あるとしてもまれである

→アジアにおける文化圏の研究には他の概念による方法が必要
＝大きな地理的スケールでの考察によるよりむしろ、生態学的な枠組みでの明確で詳細な分析によるもの